

第4回高知県社会教育委員会（平成31年4月1日～平成33年3月31日任期）会議概要

令和2年5月29日（金）13:00～15:00

高知県庁西庁舎2階 教育委員室

出席委員（岡西博文、竹中利文、
森岡千晴、川田朋子、
川田米實、徳弘朋子、
吉富慎作、廣末ゆか、
内田純一）

1 開会（13:00～13:15）

高知県社会教育委員長挨拶

2 議事（13:15～15:00）

テーマ：地域全体で子どもたちの成長を支える社会教育のあり方について

～「厳しい環境にある子どもたち」を社会教育の視点から支える方策～

（委員長）

それでは協議を始める。「居場所づくり」に関連した意見はないか。

（委員）

子ども食堂は今、弁当を持って帰ってもらう、或いはスクールソーシャルワーカーが困っている家庭に届けるという形式で続けている。6月からは人数制限やバイキング形式をやめ、あらかじめ盛り付けておく等の対応をすることで再開を予定している。他にもアルバイトがなくなってしまった学生向けに食材を渡すといったことも行っている。

（委員）

青年団では、子どもたちに喜んでもらう場所や環境を届けるという活動に取り組んでいる。今回の提言の中で、昨年度におこなった中間取りまとめを受け、既に事業化した部分として【自然体験型学習の充実と人材の育成】があるが、特に今年度は、青年団としてこの部分について力を入れていく予定で、参加した子どもが将来青年団に入り、伝える側になるような循環に繋げていきたいと考えている。

（委員）

さまざまな形で居場所をつくることは非常に有効に思う。それは特異性に繋がるためである。交流イベントがあったとして、参加者の多くが前回と同じ参加者になっているということは往々にしてあるが、これまでに一度も参加していない子どもたちにこそ手を差し伸

べ、漏れなく参加できるようにすることが重要であり、また、各団体が子どもたちの特性に応じてターゲットを変えていくことが大切である。

参加して楽しかったで終わらず、参加者同士が繋がっていくことが最も重要である。行政に質問や相談をするというのはなかなかハードルも高く、こうして繋がった関係性であれば気軽に相談し合えるようになっていく。

(委員長)

委員の仰るように、多様な居場所づくり、或いは(子どもたちを)漏れなくカバーするという事は非常に大切。

特に、『多様な』という言葉には、対象や内容、機能などいろいろなケースが想定される。いろいろなチャンネルで社会と繋がることが大切。

(委員)

人見知りの私自身の体験として、子育てサークルに行くということは当初気の引けるものだった。誘われていったのがきっかけだったのだが、それまで自身で抱え込んでいた、子育てに関する悩みを気軽に相談し合えたことで、すごく気が楽になった。

また、その時にできた横のつながりは、子どもが大きくなった今でも続いていた、或いはひろがっている。

こうした居場所が増えることはもちろん大切で、且つ保護者と子どもと一緒にいけるようなところであれば、保護者だけでなく、子どもたち同士も繋がり、交友関係が広がるのが期待できる。

保護者や子どもたちに何かあった(悩み事ができた)とき、相談できる場所、安心できる空間が増えていった欲しい。

(委員長)

居場所づくりに興味のある団体の背中を押してあげられるような、或いはその取組を深めてあげられるような支援が必要。

居場所、空間をつくってあげたら後は自然と横のつながりができていくので、そうした環境を整えられる人材の育成も求められてくる。

(委員)

コロナが流行し始めてから様々な相談を受けるようになった。その中で、「こういう支援があるよ」と紹介してはいたが、その支援の選択肢が少ないと、かえって追い詰められてしまうのではないかと感じた。フィットしなかった場合どうしようという脅迫概念も生じてしまい、萎縮してしまう。そうした点から、多様性という選択肢を多く持つということが大きな意味をもつと考える。

(委員)

支援センターを利用者目線で考えたとき、つらかったり恥ずかしいなどの理由から、一般的には『行きたくない場所』であるとは思いますが、いかにしたら利用しやすくなるのかということ意識している。

今年度は学校と連携し、地域のすべての子どもたちを何らかの形で支援していくという目標を持って取り組んでいる。

支援センターを利用してもらえるようになるには、話をよく聞いてあげることがとても大切である。

支援がある成長段階で途切れてしまわないように、継続的な支援体制が求められている。教員の中にも社会教育的視点をもった職員を増やしていかなければならない。

(委員長)

学校と並行して支援をするのではなく、両輪で継続的に、というところがポイント。

(委員)

今の風潮として、社会教育がまちづくりや子育てのツールに捉えられている側面があるように感じる。そうではなく、社会教育そのものが元気になることで、結果として地域が盛り上がり、子どもたちが生き生きと成長していける社会となっていくことが本来の在り方である。そのためにも社会教育的志向を育んでいくことが非常に大切に思う。

(委員)

子どもの成長はコロナ禍での休校や外出の自粛期間中であっても止まるわけではないので、PTA活動はとまってはいけないと考えている。

コロナ禍により、他のところではどのような取組がなされているのかというやりとりをを求める声も多く、それは横のつながりであったりするので、改めてPTAの重要性を感じたことだったが、厳しい環境にある子どもたちの保護者に活動を強いることもできないなと痛感した。だからこそ広く伝えていくことが必要であり、点から始まった活動を、線、面、そして球として循環させていくことが重要。

(委員長)

PTAは、つながりを求めていた人達にとっては『あってよかった』と感じられる組織ですよね。それはあらゆる組織にも言えることではあるけれども、社会教育が組織やつながりという部分を大切にしているところはそういうところ。そのあたりが、今回のコロナ禍によって顕著に現れてきている。

(委員)

ネットも居場所や支援の在り方として、選択肢の一つだと思う。

匿名だから本音を語れる人もいれば、会っているから安心して話せる人、テレビ会議のような場でなら話せる人など、色々な人がいる。

(委員長)

社会教育において本音を引き出すということは非常に大切。「そんなこと言ってもさ…」というようなつぶやきにこそ本音が隠れていたりするが、そうしたつぶやきをしづらい環境になってしまっていたりすることがある。本音を引き出す方法の一つとしてネットも有効。

(委員)

居場所をつなげていく居場所づくりが必要だと感じている。行政が主導する居場所は、本当の居場所ではないのではないかと考え、『遊分舎』を立ち上げた経緯がある。そこでは様々な関係性も生まれ、安心して自分をさらけ出していい場所となっている。そして、次の人生のことを考えられるようになっていく。

住民が何を求めているのかをすくい上げながら予算化していくことが重要。ニーズをすくい上げ応えていくことで地域は元気になっていく。

公民館活動が低迷している現状だからこそ、地域住民が集い交流する場が求められている。

(委員長)

地域づくりは非常に大事。地域の価値というものが問われてくる。

また、支援の在り方にしても、地域が何を求めているのかという部分が非常に重要で、それを考え続けなければならない。しかし、最終的に決めるのは本人なのだから、その自己決定力を支援していく必要がある。

(委員)

田舎になるほど行政からの支援の選択肢は限定されてしまうので、地域にあった支援を生み出していくということが求められている。多様化という言葉があるように、様々な地域の色を生み出す方法を探り、繋げていかなければならない。

(委員長)

補助金のように用途が限定されるものではなく、例えば助成金のような弾力性のある支援などもそのひとつ。

(委員)

児童家庭課のHPに児童相談所の相談件数等をまとめたデータが掲載されている。これによると、子どもの人口が減っているのに相談件数が増えていることなどが読み取れる。このあたりの情報も反映させることはできないだろうか。

(委員長)

現状を知る上で非常に興味深いデータだと感じる。提言にも是非反映させていきたいと思う。

(委員)

家族でブランコを手作りしてみたことがある。すると地域の小さい子どもたちも乗ってみたいということで集まり、子ども同士が交流しつながらる機会ともなった。リスク回避の観点から、様々な経験をするための学びの機会が減ってしまっているが、自然体験型学習が拡充されることで子どもたちに経験する機会を与えてあげたい。

(委員)

経験を重ねることで生活の知恵や工夫をすることなどを身に付けていくので、何でもなようなことであったとしても、大人になっていく上では非常に大切な経験だったりすることはある。

(委員)

遊ぶ、経験するという事は教員にも求められている。教員の中にも子どもと遊ぶことが苦手な人もいるが、子どもたちは求めていたりする。

(委員)

子どもは話を聞いて欲しい。だから一緒に遊ぶことで信頼関係の構築にも繋がっていく。

(委員)

自分たち自身も、自身が思っている以上に経験が不足しているのではないかと感じている。若い世代に経験を積むことのできる場を創出していくことも重要ではないか。

県内各地に社会教育をコーディネートしていく人材配置が必須になるように繋げていけないだろうか。

(委員)

お金で全てを解決していくビジネスの世界と、そうじゃない物々交換であったり、信頼で成り立っている関係があると思うが、都会から企業などがビジネス以外の経験を積むため

に訪ねてくることがある。

トレンドではなく、SDGsの考え方などが浸透した結果として需要が生まれているわけだが、こうした機会をうまく活用し、地域の子どもが先生役になってみるなどの新たな経験の場につなげていくこともできるのではないかと考えている。

(委員長)

資源があるところに全国から学びに来る時代。その資源が、実は高知に豊富にある。

以上で協議を終了する。

次回は提言案のまとめを予定している。

3 閉会

生涯学習課長挨拶